時評

冷静に読むまでの時間

藤島秀憲

いい評論を読んだ。「梁」81号に掲載された屋良健一郎の「短歌に見る戦時下沖縄」。タイトルが示すように、戦時下の沖縄を詠んだ短歌を丹念に調べあげた労作である。屋良は短歌をいくつかのパターンに分類し論じている。

まず、他県出身者が沖縄に滞在して詠んだ短歌。取り上げているのは山口由幾子、佐佐木信綱に師事した「心の花」の歌人で、裁判官の夫とともに沖縄に滞在した。昭和十八年に出版された『珊瑚礁』から次の歌を引用している。

・真珠湾の重油流れ来ずやと見放くれど紫ふかし琉球の海
・バナナみのるこの南国の家々にひるがへる日章旗新鮮にみゆ

山口は戦火がせまると疎開するために沖縄を離れたのだが、屋良はその後の山口作品も追跡していて、昭和二十年の「心の花」七月号に掲載された歌にも言及している。

・仏桑花砂糖黍も焦げ赤瓦の家々崩えし那覇の街おもふ

さらに、兵として沖縄に滞在した渡辺為好の歌、沖縄県出身の仲嶺俊子が看護婦として従軍したルソン島で詠んだ歌、これらを丁寧に読み解く。資料的な価値が高い文章である。

「NHK短歌」十月号の「現代短歌アンソロジー」は佐藤通雅が選んだ〈津波〉三十首。三月十一日の津波だけを取り上げる。

・屋根の上にながらへて泳ぎ来し人の寒かりしとのみ言へり小声に　柿沼　寿子
・「屋根に上れっ！」切羽詰って男が叫ぶ非常梯子で必死に屋根へ　大原都芽子

一首目は全体が説明的で巧くいっていないものの、下の句の具体性が印象深い。二首目、「切羽詰って」「必死に」の慣用句が気にはなるが場面が目に浮かんでくる。どちらも臨場感あふれる佳作である。だが、佳作でないかも知れないという不安もある。今のわたしは震災の歌を、特に被災者の歌を、冷静に読めていない。

・津波映すテレビのほとり術もなく古代の姥のように祈りぬ　佐伯　裕子
・荒海を陸へぶちまける大津波テレビの前から這って逃げ出す　松平　盟子

この二首も〈津波〉のアンソロジーから。津波をテレビで見ている〈われ〉の姿を詠んでいる。津波の歌ではあるが、主眼は祈るか逃げ出すしか出来ない〈われ〉の無力さにある。技巧的には柿沼・大原作品より優れていても、今のわたしは荒削りであろうと被災地の生の声をそのまま伝える作品により強く魅かれる。比喩や気の利いた表現は、被災者の体験から出た言葉に負けてしまっていると思うが、そう思うのはわたしだけだろうか。

震災の歌、被災者の歌を冷静に読めるようになったとき、復旧が今よりもかなり進んでいるだろう。そして、数年後・数十年後、大震災の短歌に冷静かつ正当な評価がなされ、アンソロジーに編まれ、評論に書かれることとなるだろう。短歌を冷静に読むためには、それなりの時間が必要だ。